

椿の花

△ 生

暖かく又いと閑なる日の事なりき。二三の信者を案内して今は昔の物語りなどしつゝ、苦蒸す老松の間縫ひ登りて漸く圓光庵の境内に着く。庵は四季の眺望に富むを以て名あり。庵主の請するまゝ椽に腰打かけて澁茶に喉を濕しながら遠く前方を見遣れば、遠近の山々には棚引く霞の濃く薄く天の一方に天子嶽の連山重疊して南方に展じ脚下には富士川の碧流廻りて白蛇のうねるか如く。光景雄絶真に大虛に遊ぶ心知して、一行の喜び限りなし、眼を轉じて右方を眺むれば境内の中央に擲かれる大杏樹の間より雪に輝やく七面山頂の日影神々しく、樵の振ふ斧の音に杏樹の葉の二片三片ホロ／＼と舞落つ様など書趣盡きざるものあり。やがて庵主の案内に任かせ、堂宇をめくり見れば石垣にて圍まれたる瀟洒なる地に青銅にて、造れる二基の碑立てり。庵主は先づ合掌して、さて徐ろに語るやう。その昔江戸の旗本に永見重廣と云ふものありて、二子を有せり。兄は十六にして重吉と云ひ弟は十五にして重尚と云ふ。父兄の病弱なるを憂へて密かに弟をして相續せしめんと議る。重尚之を聞いて、大に驚きその不

法を再三父に説けども遂に用ひられずして自刃す。重吉之を見て深く弟の義死を哀み、屍を抱て歎くこと限りなし。日夜に亡弟を慕うて忘るゝ能す。生きて父母に事へんか、死して弟に見へんかと。煩悶遂に弟の跡を逐うて又自殺したり。父母悲歎やるかたなく其遺骨を携て遙々この身延の山に詣でしかば、時の法主日蓮上人深く兄弟の義死に感じ哀み給ふて、此處に塔を建立したるなりと。語り終りて庵主は密かに涙を拭ぐへり。一同も此の哀れなる物語りに思はず涙を、さそはれて、題目唱へつゝ木の枝、又は花なぞ手向けながら是人於佛道決定無有疑と回向せり。余はその墓側に爰ける二輪の椿の花を取りて兄弟に擬し一同を促して歸途に就けり。

なつかしの弟したうて行く兄の

心の内もおもひやらるゝ

徴兵に出る友に與ふ

山内 慧戒

灰かに聞くに、吾兄今回徴兵検査に合格の榮を蒙れり。爲國歡喜に堪わす。筆を呵して 書を呈する所